９　道徳性の芽生えを培う指導

基本的な考え方

学校教育法第23条では、幼稚園教育の目標の一つに、「家族や身近な人への信頼感を深め、自主、自律及び協同の精神並びに規範意識の芽生えを養うこと」と示されている。幼児期が、生涯にわたる人格形成の基礎を培う時期であることを踏まえ、幼稚園生活における具体的、自主的な活動を通して、次の３点に留意し指導することが大切である。

１　基本的な生活習慣の形成を図る。

２　他の幼児との関わりの中で、他人の存在に気付き、相手を尊重する気持ちをもって行動できるようにする。

３　自然や身近な動植物に親しむことなどを通して、豊かな心情が育つようにする。

道徳性の芽生え

道徳性が発達するとは、他者や社会と調和した形で自分の個性を発揮できるようになることである。道徳性の発達は、乳幼児期から培われている他者への興味・関心や他者に合わせようとする基本的な信頼関係に始まる。やがて他者への共感性を豊かにしながら、自分とは違う他者を意識するようになり、自他両方の視点を考えて、自分の欲求や行動等を調整できるようになる過程を経て、道徳性の発達が達成されていくのである。道徳性の発達のためには、特に、「他者と調和的な関係を保ち、自分なりの目標をもって、人間らしくよりよく生きていこうとする気持ち」、「自他の欲求や感情、状況を受容的・共感的に理解する力」、「自分の欲求や行動を自分で調整しつつ、共によりよい未来をつくっていこうとする力」が必要である。これらの基盤である道徳性の芽生えを培う時期として、幼児期は大変重要である。

基本的な生活習慣の形成

幼児が生活に必要な習慣を身に付けることは、生活を健康で豊かなものにするために大切なことである。

基本的な生活習慣を身に付ける第一歩は、家庭において行われるものである。幼児は、家庭で獲得した習慣を幼稚園で生活する中で再構成し、自らの生活習慣として身に付けていく。基本的な生活習慣の形成において、自立心を育み、自己発揮と自己抑制の調和のとれた自律性を育てることは、道徳性の芽生えを培うことと深く関わることである。

人と関わりをもつ力の育成

幼児は他の幼児と関わりながら生活する中で、生活に必要な行動の仕方を身に付ける。また、友達と楽しく過ごすためには、守らなければならないことがあることに気付いていく。

さらに、幼児は他の幼児と様々なやり取りをする中で、自分や他者の気持ち、自他の行動の結果等に徐々に気付くようになり、道徳性の芽生えをより確かなものにしていく。幼児期には、教師との信頼関係に支えられて自己を発揮する中で、互いに思いを主張し、折り合いを付ける体験を通して、きまりの必要性等に気付き、自分の気持ちを調整する力が育つ。このように、規範意識の芽生えは、集団生活の中で人との関わりを深めることを通して、培われるのである。

自然とのふれあいや身近な環境との関わり合い

意欲、豊かな感情、物事に対する興味や関心、思考力、表現力、運動の能力等の基礎は、自然とのふれあいや身近な環境との関わり合いの中で様々な具体的体験を通して、身に付けるものである。

幼児は、生き物や自然の素材と関わり合う中で好奇心や探究心を満足させ、さらにいろいろと工夫して関わりを深めようとする。このような活動を通して、自然の偉大さに気付き感動体験を数多く味わっていく。また、生き物をかわいがったりその死に出会ったりして、生命の大切さを感じ、生き物に対して深い愛情をもつことができるのである。

道徳性の芽生えを培うための教師の役割

道徳性の芽生えを培うための指導は、幼稚園生活の全体を通じて行われることが必要である。また、幼児の発達に即して、入園から修了までの教育期間を見通して行う必要がある。さらに、発達は行きつ戻りつしながら促されていくことを踏まえ、幼児理解を深めながらその実態を捉え、繰り返し指導することが大切である。道徳性の芽生えを培うための教師の役割のポイントとして次のことが考えられる。

１　幼児を理解する。

〇幼児を肯定的に見る。

〇幼児の行動の意味をより深く理解する。

〇幼児の発達の過程に目を向ける。

２　状況に応じた多様な関わりを大切にする。

〇同じ行動も状況により意味が異なることを理解する。

〇幼児同士のやり取りを見守る。

〇幼児の気持ちを受け止めつつ、教師の願いを伝える。

〇毅然とした態度で教師の願いを伝える。

〇教師自身がよいモデルになる。